

疫学情報 2017年10月25日分

<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000180111.html>

感染症エクスプレス@厚労省 2017年10月6日

梅毒がわかれば医学がわかる

IDES 3期生：西島、神代、市村、高橋

この現在の日本で、梅毒の流行拡大がとまりません。2010年以降、梅毒の報告数は急激に増え続け、2010年の621例が、2016年には4557例に増えています。4000例を越えたのは、何と42年ぶりです。さらに今年2017年も、9月24日までの報告数が4086人と、年間報告数で2016年を上回るのはほぼ確実になっています。

かつて、当メールマガジンにて連載していたあさコラムの言葉を借りると「予防、そして早期検査・診断と治療、普及啓発。梅毒対策、待ったなしです」

本コラムのタイトルの「梅毒がわかれば医学がわかる」。これは、近代医学の祖の一人と言われるウィリアム・オスラー医師が20世紀の始めにいった言葉だそうです。原文は、"He who knows syphilis knows medicine"。なぜ梅毒がわかれば医学がわかるのか。それは、当時梅毒は、診断も治療もとても難しかったため、梅毒をきちんと診断できるのは腕のよい医者への証拠、と考えられていたことが理由です。梅毒は、偽装の達人”the great imitator”と言われるほど、多種多様な病変を、皮膚、陰部、口、腎臓、脳・神経、骨などいろいろな臓器におこすことがあり、診断することが難しい病気でした。ちなみに、梅毒が脳に悪さをすることを突き止めたのは、かの野口英世です。野口英世は、梅毒が進行して麻痺を起こした患者の脳組織に梅毒の原因菌がいることを証明し、これは野口英世の代表的な業績とされています。

この梅毒はペニシリンで治ります。ペニシリンが開発され、1940年代に梅毒に効果があることが確かめられるまでは、たくさんの方が感染し、命を落とす人もあとを絶ちませんでした。もちろん日本も例外ではなく、マンガ「JIN-仁」で描かれたように、江戸時代にも梅毒は非常にはやっており、特に遊郭で働く遊女の間では多かったようです。そのため、子たくさんで有名で、なんと正室が2人、側室が20人ほどもいたとされる徳川家康は、遊女との交わりをもたないよう厳に自分を戒めていた、との話が残っているほどです。

日本で本格的にペニシリンが普及したのは戦後になりますが、1948年の梅毒感染者数は、約22万人でした。その後はペニシリンのお陰で感染者数はどんどん減っていき、1990年代に入ると年間1000人を下回るようになりました。しかしながら、現在は再流行期にあります。2010年以降今日にいたるまで、梅毒は拡大を続けています。

今回の梅毒の流行には、ある特徴があります。2010年以降、梅毒の報告で多かったのは同性間で性交渉を持つ男性でしたが、2014年以降、急速に男女間で性交渉を持つ男性・女性が増えています(図)。

女性報告数の大半は20-30代の若い女性で、梅毒にかかった妊婦も報告されています。実際、生まれる子供が梅毒に感染する先天梅毒の報告数も、2012年の4例から2016年の14例に増えています。現在の梅毒は、きちんと診断がついて治療すると治る病気ですが、

おなかの中の子供が感染する先天梅毒は、早産・死産の原因になったり、生まれても重い後遺症が残ることがあります。一方で、梅毒の報告数の大多数（2016年では7割）が男性であること、また HIV に感染した男性の梅毒の有病率が高いこともわかっています。梅毒を、男性が女性にうつす可能性があることを考えると、先天梅毒は男女双方の問題なのです。

梅毒は性感染症です。ということは、

- ・コンドームを適切につかうと、感染リスクは下がります。
- ・不特定多数と性交渉をもつと、感染リスクはあがります。
- ・オーラルセックスでもうつります、このことは見逃されがちで、要注意。
- ・梅毒の症状としては、陰部や口の潰瘍、皮疹がよくみられます。
- ・梅毒にかかったかも？と疑ったら、検査を受けましょう。梅毒は早く治療すると、きちんと治ります。
- ・あなたがもし梅毒だったら、あなたのパートナーも梅毒にかかっているかも。ぜひ検査をすすめてください。

この流行、何とかせねば。あさコラムの言葉をもう一度。

「予防、そして早期検査・診断と治療、普及啓発。梅毒対策、待ったなしです。」

<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000181118.html>

ワンヘルスに関する連携シンポジウムを開催します。平成 29 年 10 月 20 日

【照会先】健康局結核感染症課

～薬剤耐性（AMR）対策をテーマに 11 月 27 日、日本医師会大講堂で開催（入場無料）～
薬剤耐性菌による感染症がヒト、動物において拡大していることは世界的な脅威となっています。薬剤耐性（AMR）問題に対応するためには、医療、獣医療などの関係者が分野横断的に連携する「ワンヘルス・アプローチ」の取組が重要であるとの認識が世界的に高まっています。

こうした観点から、医療・獣医療の各分野の最新の知見、取組を紹介し、医療・獣医療等の AMR 対策に関わる分野の方々を始めとした国民の皆様に対して、AMR の現状と抗微生物剤の適正使用等の対策の重要性について、広く普及・啓発するとともに、分野間の連携を推進するために、厚生労働省主催、日本医師会、日本獣医師及び農林水産省共催で公開シンポジウムを開催します。

【シンポジウムの概要と申込方法】

■ 日時・場所

平成 29 年 11 月 27 日（月） 12:30 開場・ 13:00 ～ 17:30

日本医師会大講堂（東京都文京区本駒込 2-28-16）